

特集

世界の難民たちと日本の私たち

— 穏やかな暮らしを求めて —

『シャンティ』 通巻289号 2017年4月1日発行 (1・4・7・10月の1日発行) 1985年6月28日 第三種郵便物承認

巻末言 道



難民キャンプから学んだ原点

八木澤克昌 アジア地域ディレクター

「パイ、カオイダン」(タイ語でカオイダンへ行きます)が、私がタイで最初に覚えたタイ語の言葉。1980年7月、タイ・カンボジア国境の街アランヤプラテート。この街に常駐してカオイダン・カンボジア難民キャンプへ「図書館」を開設するために毎日、リュックサックに絵本を詰め込みヒッチハイクで通うことから始まりました。

私たちは難民問題の本質は「民族の文化的アイデンティティの喪失の危機」と考えていました。命からがら身一つで祖国を逃れて、難民キャンプに避難する人々がキャンプから持ち出せるものは、教育によって身につけた知識と手に付けた技術。心にしっかりと自らの文化的アイデンティティを刻めば、将来祖国に帰還した時や第三国定住した時の生きる勇気や尊厳と自立につながると確信していました。

竹とニッパ椰子でできた難民キャンプの図書館では、桑の葉を食べるように無心でカンボジア語の絵本を読んでいた。衣食住は、人の体を守り、命を支える。本は心の栄養になる。難民キャンプでは心の飢えと渇きがある。文字を知ること、学



1983年のカオイダン難民キャンプの図書館

ぶことは人間の生きる力と尊厳につながることを学んだのでした。

カンボジア難民キャンプの経験は、アフガニスタンでの図書館活動にも生きています。銃を手にしていたムジャヒディン(イスラム戦士)の司令官は、今では絵本を手にして子どもに読み聞かせをしています。「銃を捨て子どもに絵本を」。読み聞かせや絵本の力は、宗教、文化にかかわらず普遍的な意味があることを証明しています。

難民問題は、シャンティの原点。私たちがかわり続けてきたミャンマー難民、アフガニスタン難民の帰還の一步がより進むことが想定される今年。難民問題は、私たちの生きる世界の今を映し出す鏡です。難民の人権と尊厳が守られ、帰還が平和的に進むことを現場から難民に寄り添い見守りたいと思います。



2016年12月10日
設立35周年記念イベント

4 特集
世界の難民たちと日本の私たち
 — 穏やかな暮らしを求めて —

16 世界の絵本を読んでみよう
 「お母さんの愛」(アフガニスタン2016年出版絵本)

18 わたしたちのお祭り
 カレン新年

19 **世界の現場からAIRMAIL**
 From活動の現場
 ▶アフガニスタン
 ▶BRC ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプ

28 シャンティな人たち
 小林普子 NPO法人みんなのおうち理事/副代表

30 SHANTI HISTORY
 1981年 — 活動開始の原点 —

31 お知らせ/編集後記

32 道「難民キャンプから学んだ原点」
 八木澤克昌 アジア地域ディレクター



タイに設立されたカンボジア難民キャンプで、子どもたちの笑い声がよくみえる日を目指し、1981年に開始した移動図書館活動。これがシャンティの難民支援のスタート地点でした。それから時は経ち、難民支援も36年目となったいまも、世界中には故郷を離れ、避難生活を強いられている人々が多く存在します。世界情勢が日々変わっていくいま、日本にいる私たちにできることは、どんなことでしょうか？

この度の特集では、世界の難民情勢とシャンティの難民支援の活動について紹介してまいります。

Shanti vol.289 CONTENTS



今号の表紙
 イスラマバード近郊の
 アフガニスタン難民キャンプにて。
 2009年撮影
 ©Yoshifumi Kawabata

ミャンマー(ビルマ)
 難民キャンプにて。
 2016年撮影
 ©Yoshifumi Kawabata

世界の難民たちと日本の私たち

— 穏やかな暮らしを求めて —

紛争や人権侵害などから命や生活を守るため、母国を離れ避難生活を余儀なくされた「難民」。難民問題は遠い地の話ではなく、日本を含む世界全体の問題と言えます。

数字で見る世界の難民

■ 難民受け入れ数トップ3

- 1位 トルコ (250万人)
- 2位 パキスタン (160万人)
- 3位 レバノン (110万人)

2014年に続き2015年も、トルコが最も多くの難民を受け入れました。

■ 第三国定住

10万7100人のうち
日本は合計31家族123人

(平成28年まで)

各国の政府統計によると、10万7100人の第三国定住を許可してきました。

世界ではいま、

3秒にひとりが、

故郷を離れ、

避難生活を

強いられています。

■ 難民の年齢

51%が18歳未満の子ども

この比率は2014年、2015年とも
に同じ割合となっています。

■ 避難を余儀なくされた人

1日あたり

平均3万4000人

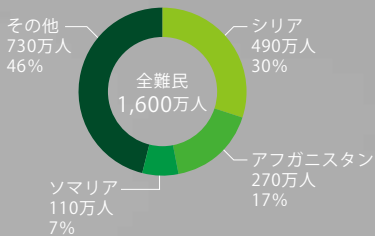
毎分24人に相当する人数が国内外で保護を求め、避難を余儀なくされています。

■ 発展途上国で

避難生活を送る難民

全体の86%
後発開発途上国は全体の約26%にあたる420万人の難民に庇護を提供しています。

■ 難民の出身国



データ出典元：UNHCR「Global Trends 2015」

©Hollandse Hoogte / Warren Richardson

日本の難民受入事情

世界情勢の変化により、難民の数は年々増加しています。1981年に難民条約に加入した日本は、日本に逃れて来た難民を保護する責任を負っています。

2016年、世界の79カ国から逃れてきた1万9100人が日本で難民申請の手続きを行い、28人が難民認定を受けました。申請者数は過去最高を記録しましたが、認定数は低い水準にとどまっています。これまで認定された人や、申請中の人を含めると、約2万人の難民が日本で暮らしています。日本の難民認定は難民を助けるよりも、取り締まるという視点が強いだけに、認定者数が限られていると言えます。また、認定のための制度面が整っていないこと、難民に対する日本社会の認知が広がっていないことが難民け受入れの進まない理由と言えます。

では、安全を求め日本にたどり着いた難民はどのように暮らしているのでしょうか。来日直後の多くの難民が置かれている状況は非常に厳しいです。日本での知り合いもおらず、言葉も分からず、難民申請に関する情報も持っていません。持参した現金は数日から数週間底をつき、ホームレス状態に陥ってしまうこともあります。難民認定申請後、政府からの支援金を受け取るための審査には約2〜3か月かかるうえ、受給額も限られています。また、難民申請の結果が出るまでには約3年かかる上、審査結果を待つ人は1万人を超えており、結果取得まで長い時間を要しています。

今後、日本がより適切に難民を保護するためには、制度面と社会の認知を変えていくことが必要と言えます。

取材協力、資料提供：

難民支援協会 (JNR) www.refugee.or.jp
データ出展元：法務省 www.moj.go.jp

シャンティ 難民支援の36年間

タイに設立されたカンボジア難民キャンプでの移動図書館の開設から始まった、
シャンティの歴史。この36年にわたる難民支援活動の軌跡を紹介します。



2001年 アフガニスタンで 食料配布を実施

2001年に発生した同時多発テロ後、アフガニスタンの国内避難民の家族への食料支援、パキスタンに逃れた難民の子どもへの支援を開始。

1985年

タイのラオス難民キャンプで
印刷活動を開始



印刷所と図書館活動を開始。数台の輪転機で、小学校の教科書を印刷することが活動の中心でした。

1980年

タイのカンボジア難民キャンプに
図書館を開設



1980年6月に移動図書館活動を開始し、同年8月に難民キャンプに常設図書館を設置。ポルポト政権下の焚書政策で消失してしまったカンボジア語図書の復刻も行いました。



2016年

アフガニスタン帰還難民の
支援を開始

パキスタンに逃れたアフガニスタン難民の帰還がはじまり、最低気温が氷点下になる冬を越せるよう、毛布や食料支援を開始しました。



2000年

ミャンマー(ビルマ)難民
支援事業を開始

5つの難民キャンプで、図書館建設やカレン語・ビルマ語での絵本出版、図書館員の研修などの図書館活動を開始しました。



子どもたちに
笑顔が戻る日を目指し
開始した移動図書館活動

シャンティの活動の歴史は難民支援の歴史ともいえます。シャンティの前身である曹洞宗東南アジア難民救済会議（J S R C）が活動を開始したのは、タイに設立されたカンボジア難民キャンプでした。当時、ベトナムのカンボジア侵攻以来、タイとカンボジアの国境は、生きるために祖国から逃れてきた難民で混乱を極めていました。喜びや悲しみの感情を顔に表すことがとすら忘れてしまった子どもたちに再び笑い声がよみがえる日があるのだろうか。難民が未来に向かって生きるためにはどんな活動が必要なのか。悩む日々が続く中、移動図書館活動を開始しました。

36年間の支援の軌跡

その後、常設図書館を開館し、キャンプ閉鎖まで運営しました。キャンプの図書館で学びを体験したネルさんは言います。「難民キャンプで暮らしていた頃、図書館に通いました。毎日本を読む時が唯一幸せを実感できる時でした。祖国を知らない子どもたちが自国の民話に触れられることはとても大きな意味があったと思います」。ネルさんは1979年にカオイタン難民キャンプに逃れ、キャンプ閉鎖とともにカンボジアへ帰還しました。カンボジア難民キャンプでの経験が現在のシャンティの活動に受け継がれています。

シャンティの 主な支援内容

「毛布、食料、 調理器具の配布」

2016年12月4日から2017年1月28日にかけて、ナンガハル州ベストド郡とクズクナル郡の帰還難民と受入家族960世帯、6,400名に対し毛布と1カ月分の食料支援を行いました



上：物資配布の様子
左：物資を受け取りに並ぶ難民たちの列と、受け取った物資を持ち帰る難民たち



支援物資

1世帯あたり食料1カ月分（お米、小麦、砂糖、食用油、お茶）と毛布6枚を支援

（参考）
内訳：米24キロ、小麦48キロ、砂糖5キロ、食用油16キロ、茶1キロ

※本事業は、ジャパン・プラットフォーム（JPF）を通じた外務省資金による助成を受けて実施しました



イスラマバード近郊のアフガニスタン難民キャンプにて

アフガニスタン難民の 故郷に還りて一度目の冬



帰還難民の越冬支援

紛争などにより、アフガニスタンからパキスタンへ逃れた難民の数は500万人を超えます。2016年6月からパキス

タン政府の方針により、難民帰還の動きが進み、2017年1月末までに60万人以上がアフガニスタンに帰還しました。

しかし、アフガニスタン政府は帰還難民のためのキャンプ設置を許可しておらず、帰還した難民は親戚や知人の家に身を寄せるか、家畜小屋などで生活しています。また、身寄りのない難民は空き地に不法に小屋を建て、劣悪な環境で暮らしています。最も多くの帰還難民を受け入れているナンガハル州は、12月から3月の冬季の間、最低気温が1度となる寒冷期を迎えます。着の身着のままの難民

が、冬を越すための越冬支援が必要とされていました。

帰還難民への支援の状況

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は難民登録された帰還難民に対して、現金を支給。国際移住帰還（IOM）は難民登録されていない帰還難民に現金と食料を支援しています。しかしながら、資金不足から、帰還難民のうち70%は支援を受けることができない見通しです。

シャンティは帰還難民世帯

を特定し、支援対象世帯リストを作成する調査ならびにアフガニスタン政府難民帰還省、国連、NGOと調整を行った上で、支援を受けていない900世帯および脆弱層を抱えるホスト・ファミリー60世帯の計960世帯に対して物資と食料を配布しました。

帰還した 難民の厳しい生活状況

パキスタンから帰還したフルミナさんはこう話します。

「夫は数年前に失踪し、4人の娘を1人で育てています。アフガニスタンに帰還した今は親戚の敷地にある家畜小屋で暮らしています。小屋は清潔ですが、食料や暖房器具はありません。子どもたちはいつもお腹をすかせています。国境を越える時も、誰からの支援もなく、今後の生活が不安です」。



フルミナさん家族

帰還に向けた 新たな取り組み



デジタル情報検索サービス

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の協力のもと、2014年にコミュニティ図書館にパソコンを設置しました。タイ・ミャンマー国境に関わる情報を見ることができます。



ミャンマー国内で図書を購入

大人の利用者向けに、毎月、新聞、雑誌、一般教養書、小説などの図書を購入して、各図書館に配架しています。種類も豊富で、ニーズに合った情報が手に入ると大変好評です。

タイ・ミャンマー国境の難民キャンプと シャンティの図書館の数



ミャンマー（ビルマ）難民キャンプの歴史

- 1949年 ミャンマー内の少数民族の反政府勢力と軍事政権とによる対立が始まる
- 1975年 戦闘や人権侵害を逃れて人々がタイ側へ流出
- 1984年 正式にタイ・ミャンマー国境に難民キャンプが設立
- 1916年 タムビン、ヌポの2キャンプより71人の難民が帰国



写真はキャンプホールでの帰還に関する説明会の様子

ミャンマー（ビルマ）難民 30年ぶりの祖国へ 始まった帰還への支援

コミュニティ図書館による 帰還準備支援

1984年にタイ・ミャンマー国境に公式に難民キャンプが設置されてから33年が経ちました。ミャンマー国内での戦闘の激化に伴い、多くの難民が国境を渡ってタイへ逃れ、一時は難民キャンプの人口が15万人以上に膨れ上がりましたが、第三国定住などが進み、現在は、約10万人が滞留しています。

2016年10月、タイ・ミャンマー両政府の合意の下での初めての難民帰還があり、ヌポ難民キャンプとタムビン難民キャンプから20世帯、71人が国際機

関の支援を受けて祖国へ帰りました。主な帰還先はカレン州になりましたが、ヤンゴン、バゴー地方域、その他の州へ帰還した人々もいました。2017年のはじめにも、数十世帯の帰還が予定されています。

このように帰還の動きが出てきていますが、難民キャンプ内ではまだ帰還を希望する人々は少ない状況です。安全や土地の確保、身分証明書の取得、生計手段や医療、教育へのアクセスなど、さまざまな課題が山積しており、難民が尊厳をもって帰還できるまでには、まだ時間がかかる見込みです。

シャンティでは、2000年

からコミュニティ図書館事業を実施してきましたが、特に近年は図書館の重要な役割の一つである住民への情報提供に力を入れ、難民キャンプ委員会や国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）と協力しながら、図書やパソコン、掲示板を通してミャンマー本国に関するさまざまな情報や帰還に関わる情報を提供してきました。制限が多い難民キャンプの中で、コミュニティ図書館は住民にとって貴重な情報収集の場となっており、重要な情報提供は、非識字者、障がいを持った人々、主要言語がカレン語ではない少数民族にも配慮し、図書館員によるサポートや複数言語による情報の紹介なども行っています。

帰還に対する住民の不安は尽きませんが、コミュニティ図書館からの情報提供を通して、少しでも不安を和らげ、将来の帰還に向けた準備の一助になりたいと考えています。

難民キャンプの施設を紹介!



配給所

難民キャンプには配給を行う配給所があります。ここで、必要な食料(米・油・魚のペースト・豆など)をもらいます。



水道

水道は、人が多く住むところに設置され、みんなで共有して使っています。洗濯する人もいれば、家に持ち帰って生活用水として使っている人もいます。



学校

この学校は1年生から6年生までの約300人が通い、13人の先生が教えています。

また明日!
おやすみなさい

20:30 就寝



夜は早く寝ます。まだ外が明るいうちに、食事や明日の準備を済ませて、家族と一緒に寝床につきます。

17:30



夕食・お風呂

15:30



放課後

図書館では、お手伝いもしています。図書館がいつもきれいだと思いがちです。



放課後

友達と大きな石に登って遊ぶこともあります。高いところからお兄ちゃんがサッカーをして遊ぶのをよく見えています。



14:45



図書館へ

放課後、親友と図書館に遊びに行きました。普段から、図書館や家でも一緒に借りた本を読んでいます。



ミャンマー(ビルマ)難民キャンプの1日

キャンプ内には図書館や学校、職業訓練学校をはじめ、様々な施設があり、子どもから大人まであらゆる民族の人々が暮らしています。

難民キャンプに暮らすポー・ポー・エちゃんの1日から、難民キャンプの日常をのぞいてみましょう。

ポー・ポー・エちゃんのある1日に密着

プロフィール

年齢: 6歳(小学1年生)

家族構成: 両親、兄2人
(12歳と14歳)

民族: カレン

よく親友のポー・ヘ・ブルー・ソエと一緒に遊んでいます。第1小学校の1年生で、好きな教科はカレン語。学校図書館が整備され、学校や図書館で本に触れる機会も増えています。休み時間や放課後は、友達とかくれんぼをして遊ぶのが好き。



7:20



登校

学校は歩いて5分。ノートや鉛筆、水筒を持って行きます。

6:00



朝食

ごはんに木の実、卵を混ぜたものにとどき野菜が付いてきます。

5:30



起床

朝起きて、シャワーを浴び、歯磨きをして、学校に行く身支度をします。

1日のはじまり!

7:45



授業スタート

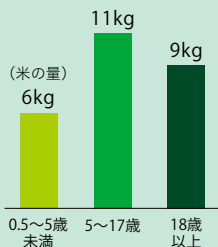
この日は、授業の前に先生が手遊び歌をしてくれました。

6. 人気の職業訓練コースベスト3

- 1位 料理
- 2位 裁縫
- 3位 コンピューター

参考) ADRAより聞き取り

5. 配給される食料 (メラウ難民キャンプの場合)



※キャンプによって差があります

4. 図書館の月間利用者数 (2016年平均)

月間利用者数:
3万5,324人

1図書館あたりの月間利用者数:
1,682人

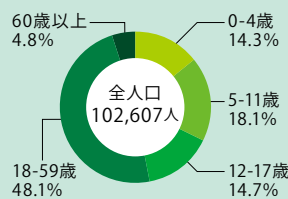
参考) SVA月間利用者記録より

3. 学校に通う子どもの人数 (カレン系キャンプのみ)

メラ	ウンピナム	ヌポ	メラウ
1万588人	3,503人	3,581人	4,145人
メラマルアン	タムヒン	ドンヤン	
4,689人	1,699人	1,083人	

参考) Produced by Karen Refugee Committee Education Entity(KRCEE)-December, 2016-2017, "2016-2017 Academic Student/Teacher Statistics In 7 Karen Refugee Camps"

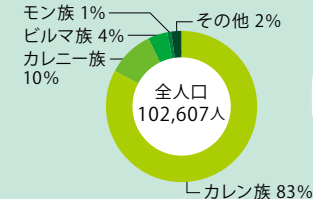
2. 全人口と年代別分布 (カレン系キャンプ含む)



(登録難民50,411人・被登録難民52,196人)

参考) UNHCR Thailand Border Operation, Information Management Unit "RTG/MOI-UNHCR Verified Refugee Population" 31st Dec 2016

1. 難民キャンプの民族の割合 (カレン系キャンプ含む)



数字で見る
難民キャンプ



こんにちは！
ミンガーラーバー

ピン・ゾン・アン 10歳 民族:ビルマ族
家族構成:両親、兄2人、姉1人(キャンプにいない)、甥・姪各1人(姉の子)

●**これまでのこと**: 難民キャンプに来たのは、僕が2歳か3歳の時だと聞いています。小さかったので当時の記憶はありません。

●**これからのこと**: 将来、先生になって、英語を教えたいです。海外の人たちと英語で会話をする先生を見て、カッコいいなと思ったからです。もし英語が話せたら、海外で役に立つし、外国の方とコミュニケーションが取れるようになります。

わたしのお気に入り



僕の好きなものは、図書館にある『11ぴきのねこ ふくろのなか』(こぐま社)という絵本です。面白くて、つい音読したくなります。好きな場所は、学校です。友達と会えますし、先生が僕たちに勉強を教えてください。



こんにちは！
ミンガーラーバー、
アッサラーム

アールワ 24歳 民族:ムスリム(ビルマ族)

●**これまでのこと**: 両親がミャンマーで迫害に会い避難したワッカ難民キャンプ内で生まれました。1999年以降にキャンプの統合が起こり、ウンピラム難民キャンプに移りました。

●**これからについて**: 将来は、第三国定住をしたいと思っています。どの国に行きたいかは、決まっていますが、好きな芸術や歌、芝居を勉強したいと思っています。

わたしのお気に入り



ときどき図書館に行きます。主人公が逆境を乗り越えて鬱から立ち直る話を本で読んで、救いは必ずあると信じるようにしています。



こんにちは！
ハラゲー

フ・サム・ナー 57歳 民族:カレン族 家族構成:夫、養子3人

●**これまでのこと**: 当時のミャンマーでの暮らしは厳しく、母親の具合が悪くなってしまったことをきっかけに、2001年に移動してきました。

●**これからのこと**: 難民キャンプが閉鎖になれば、私はミャンマーに帰るしかありません。現在の国政が、どうなっているのか、わずかな情報では判断しにくく、様子をうかがいたいと思います。子どもたちへの良い教育や安全が国内で確保されるのであれば、帰還も見えてくるでしょう。

わたしのお気に入り



人のために何かをすることが好きで、最近、なんらかの理由で教育の機会に恵まれない子どもたちのために本を借り、彼らの学習を促進しています。また私自身、本が好きで3日に一度は図書館に足を運んでいます。

ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプの

ピトピト

難民キャンプには多くの民族とあらゆる年代の人々が暮らしています。それぞれの暮らしと未来への想いについて、お話をうかがいました。

こんにちは！
アッサラームアライコム



わたしのお気に入り



ソー・タ・ジン 15歳 民族:ムスリム 家族構成:兄1人、妹1人、両親

●**これまでのこと**: ミャンマーでは、食料が十分でなく、学校に行けず、十分な医療も受けられず健康状態も良くなかったことから移動を決意しました。

●**これからのこと**: 将来、困っている人たちを助けられる医者になりたいです。今はミャンマーに帰りたくないです。なぜならより良い安定した、そして発展した暮らしをしたいと思っているので、少なくとも、学校に行くことができる環境、安全で安定した生活ができる環境に身を置きたいからです。

一般図書を読むのが好きです。なぜなら、継続的に広く知識やアイデアを得られるからです。世界中で何が起こっているのかを知ること、そして読書に夢中になっている間は、楽しい気持ちで満たされています。



こんにちは！
ハラゲー

エス・ガイ 32歳 民族:カレン族 家族構成:両親、妻、子

●**これまでのこと**: ミャンマーでは、通える学校がなく、学校で教育を受けたいと思い、2006年に丸2日間歩き続け、キャンプにたどり着きました。

●**これからのこと**: 難民キャンプが閉鎖されれば、私はミャンマーに帰るでしょう。将来は、今勉強しているプログラミングを使った仕事がしたいです。きっとコミュニティの役に立てると思っています。



わたしのお気に入り

事務所で、プログラミングの勉強するのが好きです。コンピューターが使えることは、他の組織やNGOの人たちと仕事をするとき、有利だと考えています。

1

ナヴィドはお母さんの言うことを聞かない行儀の悪い子どもでした。ナヴィドは、まだ飛べないひな鳥を見つけて、空に向かって放り投げました。ナヴィドがひな鳥を投げた瞬間にお母さん鳥がひな鳥をキャッチして飛んでいきました。



2

ナヴィドのお母さんは、いたずらばかりする息子を叱っていました。けれども、ナヴィドは「やりたいようにやらせてよ」と反抗しました。そんなナヴィドの性格が直るようお母さんはアッラーの神にお祈りしました。



世界の絵本を
読んでみよう

18

アフガニスタン 2016年
出版絵本

お母さんの愛

3

ナヴィドはある日、木に鳥の巣を見つけてきました。巣には、2匹のひながいて、お母さん鳥が口移してエサを食べてさせていました。その様子を見たナヴィドは、小さい頃お母さんが口もとまで食べ物運んでくれたことを思い出しました。



4



その帰り道、ナヴィドは道に捨てられていたバナナの皮で滑って転んでしまい、手をケガしてしまいました。

5

「お母さん！」と泣き叫びながら家に帰ると、お母さんは驚いてすぐに病院に連れて行ってくれました。初めてナヴィドは「お母さんは僕をこんなに愛してくれているんだ」と気がつきました。



6

ナヴィドはお母さんの手にキスをしながら「ごめんなさい。やつとお母さんの愛が分かったよ」と、言いました。お母さんは「あなたの将来のために勉強しなさい」と言いました。ナヴィドは勉強を始めて、クラスで一番の成績を取りました。



世界の現場から

AIRMAIL

To 日本の皆さん From 活動の現場

このページでは、
アジアの各国で活動する
ボランティアの様子や
スタッフを紹介します。

From Afghanistan

アフガニスタン

2003年より開始した、学校建設
と図書館活動を中心としたアフガ
ニスタンでの教育支援事業。現在
は難民への支援も始まり、さまざ
まな形の支援を行っています。



From BRC

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ

2016年、タイとミャンマー両政
府合意の下で初めて71人の難
民が帰還しました。それに伴い、
支援内容も日々変化を見せてい
ます。



伝統的な楽器を披露（トウモロコシを使って作られたもの）



カレン民族のドンダンス
©Saw Mort/Karen News



カレンの民謡と太鼓のパフォーマンス

カレン族にとって、カレン新年は
家族や親戚、地域の人と集い、平
和を祈り、民族の繁栄を願う大切
な日です。カレン新年は太陰太陽
暦によって定められるため、西暦上
固定されず、毎年日付が異なります。
新年の朝、白のカレンワンピース
や赤のサロンなど伝統衣装を身
に着け、民族旗を手に式典に参加
します。式典では、年長者から先人
が守ってきた文化や歴史を伝える
スピーチ、健康や平和を願う祈り
が捧げられます。カレンの伝統楽
器が奏でられ、伝統舞踊のドンダ
ンスが披露され、伝統料理コンテス
トなどが開催されます。式典が終
わると家族や親戚が伝統的な食
べ物などを持ち寄り、一緒に食
事を取りながら新しい1年
を祝います。

わたしたちの

お祭り

ミャンマー

カレン新年

Hot Topics

① 学校図書室

アフガニスタンでは図書室がある学校は全体の約10%しかなく、子ども向けの本も少ないため、子どもたちが本を読める機会がなかなかありません。シャンティは学校図書室の設置支援も行っており、今年は10校で図書室の設置を予定しています。

② 子ども図書館で防災訓練

ジャララバードの子ども図書館では、防災ゲーム、いわゆる防災訓練を行っています。

③ 防災紙芝居

防災意識を高めるため、紙芝居を活用した防災教育を開始します。紙芝居を使って読み聞かせできるように、教員向けの研修を行います。

④ 防災紙芝居の試作品を日本で披露

2016年来日したヌルハッサンがジャパン・プラットフォーム主催の研修で防災紙芝居の試作品を披露しました。



アフガニスタン事務所長
三宅 隆史 みやけ たかふみ

PROFILE

シャンティでアフガニスタンを担当して8年。日本ユネスコ協会連盟勤務後、1994年シャンティに入職。海外事業課長、ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所長、企画調査室長、事務局次長を経て現職に至る。

学校に通っていない子どもはまだ多く、学校の校舎も足りていません。今後も、現在の事業を対象地域を変えて継続し、図書館事業はスケールアップを図りたいです。最近では複数の教育NGOがシャンティの図書館活動に関心を持ってきています。他団体と連携し、より多くの支援をしていきたいと思っています。

教育状況は非常に悪く
教育支援のニーズは高い

私が日々活動しています。私は元々、日本ユネスコ協会連盟で広報や国際理解教育などに取り組んできたのですが、現場に近い仕事をしなく、シャンティで活動を始めました。アフガニスタンを担当して8年になりますが、遠隔でコミュニケーションを取るためトラブルへの対応が難しいと感じています。例えば校舎建設や図書館事業に防災教育を取り入れていますが、地震が多発するにも関わらず防災意識が浸透しているとは言えません。避難方法を教えるための紙芝居を制作するなど、普及に取り組んでいます。

From
Afghanistan

アフガニスタン

15年以上続く教育支援に追加し、帰還難民への援助が始まったアフガニスタンの現在の動きを紹介いたします。



遠隔での支援のため
現地職員の能力強化が必要

アフガニスタンでは、2001年より国内避難民への食料支援などを行ってきました。しかし治安悪化に伴い2007年に日本人スタッフは国外へ退去。危険と隣り合わせの状況にもかかわらず、アフガニスタンスタッフが日々活動しています。

Hot Topics

① 帰還支援を行う施設を新設中

2016年8月、各難民キャンプに自主的帰還センターの設置が発表されました。今後、この施設が帰還に関する相談窓口となり、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）やNGOから帰還候補地の情報や、出発前の危機管理講座などが提供されます。



② 食料配給システムが変更

2016年7月以降、タムヒン難民キャンプとヌボ難民キャンプで食料用クレジットカードを使った配給システムが試験的に導入されました。各家庭にカードが配布され、指定のお店で米や油などを購入できる仕組みです。



③ 難民子ども文化祭を開催

2016年11月、8回目となる難民子ども文化祭を行いました。8民族から約160人の子どもたちが参加し、各民族によるパフォーマンスには3,000人を超える観衆が集まりました。



ミャンマー(ビルマ)難民事務所
インターン
浅木 麻梨耶 あさき まりや

PROFILE

大学院在学中の24歳。ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ事務所のインターンに応募し、2016年5月から現地での活動を開始。大学院では、ボランティアの経験から「遊び(体験)を通じた学習」について研究中。

④ 増加する自殺件数

難民キャンプ内での自殺が増加しています。規模の大きいメラ難民キャンプでは、1年に14件の自殺が確認されました(2015年)。特に若い世代を中心に、劇的に変化している難民キャンプ外への恐れがストレスとなっているようです。支援団体は、病院でのカウンセリングをはじめ、悩みを抱え込まないよう呼び掛けています。

地区へも移動図書館を配布し、コミュニティや青年ボランティアと協力してより多くの住人の読書機会を確保しようと尽力しています。
難民キャンプの人々が、安全と尊厳の下、この地を去ることができるまで、彼らに寄り添うという方針のもと、住民の声を聞きながら、難民キャンプの住人や帰還民に対してどのような支援ができるかを模索したいと考えています。



From
BRC

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ

両政府合意の下での初めての難民帰還が開始された、現地の様子をお届けします！



人々の生活を豊かにする
図書館の力を実感

2000年に難民キャンプ事業を開始し、17年目。現在タイとミャンマーの国境にある7つの難民キャンプで21図書館の運営を行っています。図書の出しや読み聞かせはもちろん、情勢変化や帰還促進の動きを受けて、ミャンマー国内の政治動向や帰還候補地に関する情報提供をオンラインパソコンや掲示板を利用して行っています。

安全と尊厳の下、この地を去ることができる日まで

私は、大学4年の時にボランティアに参加したことをきっかけに難民支援に携わるようになりました。事業にかかわって間もないですが、図書や図書館がいかにか人の生活を豊かにしてくれるか、日々身をもって感じています。

最近では、図書館から離れた

AIRMAIL

事務所の中をのぞき見！



本棚：図書館に配架する絵本をカレン語・ビルマ語・日本語・タイ語に分けて保管しています。



事務所は、難民キャンプ担当デスク、出版・教材担当デスク、総務部に分かれています。



教材担当デスク：読み聞かせに使うエプロンや紙芝居、ビンゴゲーム等の教材を作成しています。

Close Up



メインルーム：多い時には月に1000冊を超える本が届き配架の準備を行います。



キャンプ担当デスク：各難民キャンプ担当者が、利用者の記録を整理したり図書館内での研修会の準備をしています。



事務所があるメーソットは、ミャンマーとの国境から東に約2キロに位置する都市です。



中古自転車の仲買

中古自転車の流通業で有名な地域。中古自転車の多くが日本からの輸入品です。



国境：モエイ川

タイ・ミャンマー友好橋を利用して、人や物が行き来します。

From BRC / ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ

現地スタッフの1日

タイ・メーソットの現地スタッフの日々の暮らしぶりや業務について紹介します。

図書館コーディネーター
フリーダラット・
タマタサナディー
(エツ)さんの
一日に密着

PROFILE
カレン族の現地スタッフ。2004年に入職。UNHCRで働く夫と1歳の娘の三人で暮らしています。



6:00 起床

7時に娘が起きるまでに、身支度や朝ごはんの支度、掃除を終わらせます。



8:00 朝食

娘の入浴や朝ごはんの後で朝食。フィッシュペーストやスープ、ごはんを食べます。



8:30 出勤

出勤し、朝のミーティングに参加後、車で図書館へ向かいます。



業務開始



10:30 図書館で会議

活動の振り返りや今後の方針について話しています。



13:30 技術研修会

図書館や遠方での読書推進活動で活用できるようなレクリエーションを学びます。



15:30 図書館員へヒアリング

図書館員とコミュニケーションを取るようにしています。



22:00 就寝

家族と一緒に寝ています。娘が小さいので夜中に起きなければならぬこともあります。



18:30 夕食

この日の夕食は、カノムチン(タイ風そうめん)です。よく事務所のスタッフを招いて一緒に食事をしています。



20:00 家族団欒

子どもと遊んだり、一緒に本を読んだり、テレビを見たりして過ごします。



仕事も育児も両立中の働くママの一日を拝見！

私は以前、カレン系の団体で働いていましたが、2004年から図書館コーディネーターのアシスタントとして働き始めました。現在は、難民キャンプのモニタリングやレポートのとりまとめ、トレーニングの実施を行っているです。休日は、家族と出かけたり教会に行くことが多い、最近歩き始めた娘の成長から目が離せません。

私たち、タイ・カレンの人々はよく食べよく笑う、人懐っこい性格です。訪問客を大量の料理でもてなすが、「タイ・カレン文化」なのですが、友人はもちろんです、会って間もない方でも、家を訪ねると「ごはん食べた？」と声をかけます。また家族や親戚の絆が強く、離れて暮らしている、顔を合わせればすぐに大家族のように受け入れ合います。



小林さん識字イベントでの講演

小林普子

こばやしひろこ
NPO法人みんなのおうち理事／副代表、NPO法人「10代・20代妊娠SOS新宿—キッズ&ファミリー」理事／副代表、NPO法人「子育て施設ゆったりく」の監事、新宿区大久保地区協議会委員、外国ルーツの子どもの学習教室「こどもクラブ新宿」コーディネーター。

長年、新宿区を拠点に子どもと子育て支援、外国ルーツの家庭支援や外国ルーツの子どもの学習支援を行っている「NPO法人みんなのおうち」の小林普子さんにお話を伺いました。小林さんは、第三国定住政策で来日したタイ国境ミャンマー（ビルマ）難民キャンプの子どもたちの学用品支援や教育相談を継続して行っています。シャンティとは、毎年新宿区立大久保図書館が主宰するイベント「わくわく森のキャンプ」で協働しているほか、2016年の国際識字イベントのゲストスピーカーとして講演頂きました。

2004年、外国ルーツの女子中学生が外国籍の3歳の子をマンションの踊り場から突き落とした事件がありました。女子中学生は日本と母親の母国を行ったり来たりして、いずれの国にも居場所がなかったそうです。そのような時にご縁があり、新宿区の久保小学校で外国人のための親子日本語教室を開始しました。教室に通う親子から、ある男の子のことを相談されました。両親はフィリピン人で、本人も日本語ができません。学校の勉強についていけないから見てほしいと。この子の学習支援を行ううちに活動が口コミで広がり「うちの子も見てほしい」という要望が増え、外国ルーツの子どもたちの学習支援を行う教室を正式に立ち上げました。

2007年からは新宿区との協働事業として「こどもクラブ新宿」と名前を変え、外国ルーツの子どもの日本語と学習支援

を行ってきました。当初、認知度が低く、生徒も少ないため、新宿区の担当者と区内の小中学校を回り活動説明を行いました。「学校でもできないような学習支援を個人でできるわけではない」と冷たくあしらわれました。

現在、教室では毎週火・木・土曜日の夕方から夜にかけて、新宿区内の小中学校に通う約30名の子どもの勉強を60名の登録ボランティアが交代で見えています。教室に通う子どもたちの母親は全員が外国ルーツで、多くが生活保護を受け、複数の場所で仕事しながら生活しています。親も日本語が不十分で、学校からのお便りに書かれた内容が分からないことがあります。例えば、社会科見学で子どもに何を持たせてよいか分からないお母さんに「水筒」「おてふき」「お弁当」について電話で説明することも。難民の家族と関わるようになったのは、新宿区が主催する

第三国定住政策で来日した難民を受け入れるための地域説明会に参加したことがきっかけでした。就学児童を含む難民家族が来日することが決まっている中、教育支援の体制が決まっていないことに唖然としたそうです。教室の運営経験を持つ小林さんが教育相談に関わるようになるのに時間はかかりませんでした。

「子どもたちは学校の勉強を通して、身につけなければいけないことがたくさんあります。子どもたちに関わるためには、知識と経験が必要です。日本語を教えることだけではなく、日本で生きることを教えているので、時には厳しいことも言いま

す。難民を受け入れることは国際交流ではなく、一緒に地域を作る仲間として受け入れる意識を持つことが、多文化社会を築く上で最も重要だと感じています。」

（聞き手：広報課課長鈴木晶子）



教育センターでの学習の様子



こどもクラブ新宿での活動

シャンティからのお知らせ

松永名誉会長、丹羽耕健師 ご逝去

1月2日、丹羽耕健師（享年71歳 泉龍寺／静岡県伊豆市）が、2月24日、名誉会長の松永然道師（享年82歳 宗徳院／静岡県清水市）が御遷化されました。お二人は、シャンティの前身、曹洞宗東南アジア難民救済会議（JSRC）の頃よりカンボジア難民キャンプへ身を投じ、苦難の中にある人々に常に寄り添い、希望を与え続けた先達です。

丹羽師は、地域の子どもや人々とともに Think Globally, Act Locally を実践し続け、最後までその生き方を貫かれました。松永名誉会長は、故・有馬実成師と共に二人三脚で活動地の取り組みを支え、会の基盤整備に奔走されました。時に厳しく、後人たちの試行錯誤に対して常に確かな光を照らしていただいたお二人に感謝の念を捧げたいと思います。在りし日のお姿を想い、スタッフ一同心からご冥福をお祈りいたします。

事務局長 関 尚士

人事のお知らせ

●入職

嘉味田 倫慧 支援者リレーションズ課
営業担当（契約職員）
（11月1日付）

西田 喜美代 ネパール事務所
事業調整員（契約職員）
（2月1日付）


●退職

藤川 和美 事業サポート課（正職員）
（1月31日付）

2016年度の絵本が日本を旅立ちました

2月2日、東京事務所からダンボール258箱分の絵本を運び出しました。運び出しには、ご協力いただいている企業、団体、個人の方々にもご参加いただきました。絵本は3月から5月にかけて船便や航空便で各活動地に運ばれ、図書館や学校などで子どもたちが自由に読めるようになります。2016年度に集まった絵本は18,091冊で、2017年度は18,280冊を目標にしています。今年も皆さまのお申し込みを心よりお待ちしております。

※インターネットからお申し込みいただけます。

絵本を届ける運動  で検索



前列中央が松永師、右が丹羽師

編集後記

2007年から約10年間「シャンティ」のデザイン・装丁を担当してくださった矢萩多聞様に代わり、今回のニュースレターは株式会社文化工房に制作・編集を依頼させていただきました。これまで長きに渡り、共に「シャンティ」を育ててくださった矢萩様に、この場を借りて感謝申し上げます。新しいデザインの「シャンティ」もどうぞよろしくお願いいたします。

（召田 安宏）

シャンティ 2017年春 289号 | 2017年4月1日発行

発行人：若林恭英
発行所：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015東京都新宿区大塚町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220
WEB：http://www.sva.or.jp E-Mail：info@sva.or.jp
編集人：関尚士
編集・制作：株式会社文化工房
協力：P6～7／認定NPO法人 難民支援協会（JAR）
印刷：株式会社サンエー印刷

当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

©Shanti Volunteer Association.
「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。

シャンティ国際ボランティア会が、アジアや日本で活動した歴史を振り返ります。

SHANTI HISTORY

SINCE 1981

1981

— 活動開始の原点 —

35年前、カンボジア難民キャンプでの支援活動を開始して以来、アジアの子どもたちへの教育支援や緊急救援活動を行うシャンティ。今回はその1981年、活動開始の原点に戻ります。

カンボジア難民を支援するため、1980年に期間限定で設立された曹洞宗東南アジア難民救済会議（以下JSRC）。曹洞宗宗務庁内に仕切られた2畳ほどのスペースがJSRCの本部となっており、通称「難民部屋」と呼ばれた。JSRCの活動は期間限定であり、終わりあるもの。それを意識したJSRCボランティアOBたちは再び「難民部屋」に集まり始める。「これまでの経験とエネルギーをこのまま眠らせるわけにはいかない。もっと我々にできることがあるはずだ」。その強い意思のもと、曹洞宗ボランティア会（現・シャンティ国際ボランティア会）は1981年の10月に設立された。タイでの図書館活動やカルチャープロジェクト、在日カンボジア人へ向けた交流会活動等の実施を掲げ、活動はスタートされた。現在も行われている「絵本を届ける運動」は、このとき「本一冊運動」と銘打ち開始されている。募金活動しながらの動きということ、また、きちんと事務所を設けることができない状況も相まって、プロジェクトが遅々として進まないことにもどかしさを感じながらも、一歩一歩の前進が重要と考え、地道な活動を重ねてきた。



曹洞宗ボランティア会の設立当時の様子
（左手前が八木澤アジア地域ディレクター）



カオイダン難民キャンプ常設図書館

